

令和3年度 教育事業（指導者等養成研修事業）

自然体験活動指導者（NEALリーダー）養成講座（5年目）

1 事業概要

国立大洲青少年交流の家や、大洲市を流れる肱川で講義や演習を通して、自然体験活動指導者としての指導法の理解・技術の習得等を図った。具体的には、カヌーツーリングや投げ網体験の時間を設定し、受講者が「指導者」、「参加者」、「活動場所である地域」の視点をもって自然体験活動の指導について考えられるよう工夫した。



2 事業の目的（ねらい）

全国体験活動指導者認定委員会が制定した「自然体験活動指導者養成カリキュラム」に則り、青少年向け自然体験活動プログラムにおいて、発達段階に応じて適切かつ安全に指導ができる自然体験活動指導者（NEALリーダー）を育成する。

3 企画のポイント

法人ボランティア養成講座との単位読み替えが可能な部分を前半に設定することで、法人ボランティアの資格をすでに取得している参加者が、2日目からの1泊2日の参加で認定試験を受けられるように企画した。また、同様の日程で単位免除となる保育士資格、幼稚園教諭免許、小学校教諭免許取得者についても1泊2日で受講できるように企画した。

当交流の家のメインプログラムである肱川での「カヌー」を中心とした実習を取り入れてプログラム設定することにより、参加者は、それぞれの活動フィールドは違うが、指導者の立場になった時に、自分であればどのように対応するかなどを想定しながら多くのことを考え、学びを深めることができると考えられる。

- | | | | |
|----|------|---|---|
| 4 | 主 | 催 | 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家 |
| 5 | 後 | 援 | 愛媛県教育委員会、大洲市教育委員会 |
| 6 | 期 | 日 | 令和3年11月19日（金）～11月21日（日） |
| 7 | 場 | 所 | 国立大洲青少年交流の家・肱川 |
| 8 | 対 | 象 | 国公立・財団等の青少年教育施設職員、青少年教育に係る指導員やリーダー
都道府県・市町村の社会教育主事や社会教育担当職員
教職員や民間団体等で指導に携わる者やそれを目指す大学生等（18歳以上） |
| 9 | 参加人数 | | 7名（定員20名） |
| 10 | 参加費 | | 【2泊3日参加者】4,000円 【1泊2日参加者】2,830円 |
| 11 | 講師 | | 東京海洋大学 学術研究院 教授 千足 耕一 氏
(講義・演習)
東京海洋大学 蓬郷 尚代 氏
国立大洲青少年交流の家 事業推進係長 大藤 毅 (ガイダンス . . .)
NEAL主任講師
はたご屋霧中 宮岡 真吾 氏 (講義・演習 . . .)
国立大洲青少年交流の家 職員 (講義・演習 . . .) |

12 日 程

【1日目：11/19】

- 12:15～ 集合・受付（参加者：2泊3日）
- 12:30～ 開講式・ガイダンス 0.5H
- 13:00～ 講義 「青少年教育における体験活動」1.5H
- 14:30～ 講義・演習 「自然体験活動の技術（野外炊飯による夕食含む）」4.0H

【2日目：11/20】

- 8:30～ 集合・受付（参加者：1泊2日）
- 9:00～ 演習 「自然体験活動の安全管理」3.0H
- 13:30～ 講義・演習 「自然体験活動の指導」1.5H
- 15:00～ 講義・演習 「自然体験活動の技術」2.0H
- 18:00～ 講義 「対象者理解」1.5H

【3日目：11/21】

- 9:00～ 講義・演習 「自然体験活動の特質」3.0H
- 13:45～ 認定試験 0.5H
- 14:15～ ガイダンス 0.5H・ふりかえり・閉講式

13 活動内容

【1日目】

開講式後、主任講師よりガイダンスとしてNEALリーダー養成講座の大まかな流れや仕組みについて説明を行った。ガイダンス後は「青少年教育における体験活動」として、千足氏による講義があった。その後は、主任講師からレクリエーション（アイスブレイク）の指導法の説明があり、参加者が打ち解ける様子が見られた。「自然体験活動の技術」では、KYT（危険予知トレーニング）をグループに分かれて実施した。川遊びや野外炊飯の活動の様子が描かれたイラストを見て、危険だと思う部分を各自が考え、グループで共有し、全体で発表した。たくさんの意見が交わされ、充実した時間となった。その後、グループに分かれてカレーを作った。実際に子供達を引率する立場として、どのような視点で安全を意識しながら活動すると良いかグループで考えてもらい、調理を進めた。すす汚れが付かないように火をかける鍋にクレンザーを塗って、汚れがきれいに落ちる様子を体験した際は、参加者から感嘆の声があがっていた。



【2日目】

「自然体験活動の安全管理」では、千足氏によるPFD（ライフジャケット）の正しい着用の仕方、川活動における指導者の装備品について説明があった。その後はカヌーに乗り、カヌーの基礎技術獲得を目指した。

「自然体験活動の指導」では、様々な場所の河川の状態を確認した。上流にはダムがあり、川で活動する際にはダムの放流量を確認することや現地を見て河川の地形の中でどのような場所が危険なのか確認した。また、途中の河川でスローバックを投げる実習を行った。

「自然体験活動の技術」では、肱川の鮎漁の漁法の一つである投げ網について、宮岡氏に実演を交えながら講習を受けた。魚の特性や河川での漁業の規定などについて学び、実際に投げ網の投げ方等の技術習得も目指した。

夕食後には、千足氏による「対象者理解」についての講義があり、発達段階における指導方法等について学んだ。また、参加者自身のことを話す時間等も設け、2日間を振り返る良い機会となった。



【3日目】

「自然体験活動の特質」では、肱川の中流域から約6 kmのカヌーツーリングを行った。途中には瀬（流れの激しい部分）や瀬張り（落ち鮎を捕る仕掛け）がたくさんあったが、カヌー経験が豊富な参加者もあり、沈（転覆）をすることもなく、安全に実施することができた。また、ツーリング中は多くのカワセミ等の野鳥や魚を見つけたり、河原の地形や景色を眺めたりして、多くの自然体験を通じて、様々な自然を捉える視点を身に付けることができた。



1.4 参加者の声

参加者の事後アンケート結果を以下に示す。

*満足：85.7% *やや満足：14.3% *やや不満：0% *不満：0%

川というフィールドでの体験活動がまた新しい視座を拓いてくれたように思う。

ツーリングの際に鳥がたくさん見られたので、野鳥の説明や川の生物についても紹介があったら良かったと思いました。

とても丁寧に指導していただいたので、勉強になりましたし、カヤックも安心して乗ることができました。



1.5 事業の成果

今回、カヌー以外の川活動についてもプログラムとして取り入れてはどうかとの意見を踏まえ、鮎漁の手法の一つである投げ網体験の時間を設けた。カヌー活動と鮎漁については、お互いに川を利用する者として配慮する必要がある活動となることから、それぞれの立場の視点を学ぶことで、川での活動について広い視野で物事を捉えられるようにできたと考える。

1.6 事業の課題

昨年度に比べ参加者の人数が大きく減少した。今回は事業の募集期間中に新型コロナウイルス感染者が多い時期と重なったため、申込みが少なかったと考えられる。今後、事業を企画する際は、このような事態にも対応できるように、時期をずらした形で案内チラシを配布するなど、柔軟な広報等についても検討していくようにしたい。

（担当：事業推進係長 大藤 毅）